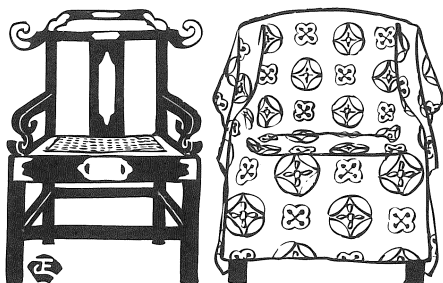




# 禅房十事 禅椅



画：正親里紗

館 隆 志

今回は、「禅房十事」の中で最初に取り上げられている「禅椅」を紹介합니다。禅の椅子という意味で、「ぜんい」と読んでいます。和尚さんでも聞き慣れない道具だと思うのですが、現在も修行道場に必ず置いてある欠かすことのできない道具です。

皆さんのお宅にも椅子はあるかと思いますが、禅椅は皆さんが普段坐っている腰掛けのための椅子とは少し異なります。椅子の上で坐禅を組むため、座面が広く作られています。そのため、全体的にとっても大きく、一人ではとても運ぶことができません。

仏教は、お釈迦さまの説法が記された経典を学び守ることを基本としています。しかし、「教外別伝（経典とは別に真理を伝える）」を主張する禅宗は特定の経典を学ぶことをしません。

お釈迦さまの悟り、お釈迦さまの仏法は弟子の摩訶迦葉尊者に伝えられます。あると

き、お釈迦さまは大勢の弟子たちの前で華をつまみあげました。すると、他の誰もが真意を理解できなかったのに、その中で一人摩訶迦葉尊者だけがにっこりとほほえんだのです。これをもつて、お釈迦さまが、摩訶迦葉尊者に仏法を伝えたとされています。このお釈迦さまの悟り、お釈迦さまの心という絶対の境地を「正法眼蔵、涅槃妙心」と言います。「正法山妙心寺」の基となった言葉ですから、皆さんも聞き覚えがあるのではないでしようか。

お釈迦さまの心は代々受け嗣がれました。そして、禅宗の僧侶はお釈迦さまに成り代わって、それぞれの言葉で法を説きました。お釈迦さまの代理として説法したのです。その説法をするお堂を法堂はっぽうどうと言います。禅寺では昔からこの法堂を最も重要な建物として位置づけています。お釈迦さまの代理である住持じゅうじ（住職）の説法、それを行うお堂こそが

最も大事だったわけです。

法堂の中央には、須弥壇しゆみだんと呼ばれる大きな台が置かれています。お釈迦さまが説法した須弥山しゆみせんという山を模して置かれているものです。この上で住持が説法するのですが、須弥壇の上に椅子を置き、修行僧を集めて椅子の上で坐禅しながらお話しする、それが鎌倉時代の住持の説法の仕方でした。この時の椅子を禅椅と言ったのです。

妙心寺では、毎年十二月十二日の関山かんざん慧玄えげん禅師の祥月命日に開山忌が行われます。この法要では、法堂の須弥壇の上に禅椅を置き、その上に開山である関山禅師の尊像を奉っています。これは、昔の説法の状況を再現したのものであると考えられます。鎌倉時代の説法の様子が伝承されていたのでしよう。ちなみに、「禅椅」は現在の臨済宗では「提唱台ていしょうだい（講座台・高座台とも）」と呼ばれ、住持の提唱ていしょう（説法）に用いられます。



ここで少し曹洞宗のお話をしたいと思えます。曹洞宗では同じ形の椅子を「高座こうざ」と呼んでいます。曹洞宗の僧侶が一人前の僧侶として認められるための「首座しゅざ法戦ほっせん式しき」という儀式があります。住持が修行僧の第一座（首座）に対して、住持に代わって問答することを許可し、それを受けて首座という役職の僧侶が禪の問答を繰り広げます。この時に住持が坐っている椅子が「高座」です。首座が住持の代理として説法する儀式に、「禪椅」が用いられているのです。

禪椅という道具は、かつて臨済宗・曹洞宗ともに住持の法堂の説法の座として用いられていたものでした。意外に思うかもしれませんが、鎌倉時代は基本的な修行生活は両宗派とも異なっておりませんでした。中国の南宋の禪寺で行われていた修行生活を、輸入して日本で再現していたからです。

一見、異なるように見える現在の臨済宗と

曹洞宗における「禪椅」の役割は、法堂における説法という中世禅林の儀式が変化したものだっただけです。臨済宗では「提唱台（講座台・高座台とも）」と呼び、曹洞宗では「高座」と呼んでいます。が、「禪椅」という道具そのものはまったく同じもので、しかも日本における源流は鎌倉時代まで遡ります。

お釈迦さまの代理である住持の説法を重んじた禅宗だからこそ、「禪椅」は日本において七〇〇年という長きにわたって、現在まで受け継がれてきたのです。

館隆志（たちりゅうし）

一九七六年静岡県沼津市生まれ。二〇〇九年駒澤大学大学院博士課程修了、博士（仏教学）。現在花園大学国際禅学研究所研究員。著書に『園城寺公胤の研究』（春秋社）、『關溪道隆禅師全集』第一巻（共編、思文閣出版）。